お天狗にさせるでせうし、考へても口惜しくなるわ。』

『えゝ、きつとさうよ、きまつてるわ。』

『八重子さんもあんなに一生懸命でお稽古していらしつたんだから、どんなに殘念だか知れやしない、私ならあんな人引つ搔いてやるんだけれど……』

『オホゝゝゝ猫か猿のやうねえ、政江さんは。オホゝゝゝ。』

『オホゝゝゝ。』

と、誰憚からず大きな聲で笑つて居る處へ、

『大ぶ賑やかねえ、皆さんお揃ひで何を騷いでらつしやるのよ。』

と、根を高くとつたルイザ卷に、白薔薇の一輪を押した氣取つた態度で、勝子が通りすがりに聲をかけました。

『いゝえね、今日のオーカリスト聲樂家の噂をして居た處なのよ、八重子さんがお氣の毒だつて。』

『さうなの、私も今日は口惜しいわ、思ひつきり失敗るといゝ。』

『本當ね、さうしたら手を拍つて笑つてやるんだけれど。』

『全くね、東京へ來て一年にもならない田舍者が獨唱するなんて、自體生意氣すぎるわ。よく圖々しくやれたものね。』

『盲蛇におぢずですとさ。』

と、政江は捨てたやうに横を向いて言ひました。が、眼早く吉野さんの姿を見付けて、

『あ、ちよいと。』

と、まだ何か言はうとして居た文子に、手で押へるやうにしてあわ

たゞしく言葉を遮りました。

『え、何？』

と、文子は怪訝さうに問ひ返しました。

『そら、ね。』

指ざす彼方の廊下から、吉野さんは何にも知らないで、俯向き勝ちに歩いて來るのでした。

『あゝ、あの人の……』

『叱ッ、だまつていらつしやいな。』

勝子が目交ぜをすると、

『はい、はい。』と、文子がおどけた聲で答へました。

『あとのハイだけ餘計ですよ。』

『おやおや。』

その調子がいかにもをかしかつたので、皆は哄と聲を上げて笑ひました。

『吉野さん！』

例の無造作な束髪にして、いぶし銀の野菊の横ざしを、やゝ後の方に品よく挿したぎりで、雨がすりのお召に、きつちり合せた襟もとからは、紫紺色うづら縮緬に白と赤とで絞つた梅の花をのぞかせて、焦茶の袴、千代田草履の鼻緒も素質なねずみ色で、どこまでも落ち付いた服裝をした吉野さんは、勝子から呼び止められて、その切れ長の瞳をきつと勝子に注いで立ち止まりました。

『何か御用ですの。』

物優しいけれど、どこか犯し難い威を備へた樣子で、はつきりときかれて、勝子はちよつとたじろぎましたが、でも勢よく、

『いゝえ、何も用なんてありはしませんけれど、たゞお喜びを申し上げやうと思つて……あなたのお部屋の美代子さんはお目出たう、あなたもお嬉しいでせう。』

「えゝ、ありがたう。』

吉野さんは何氣なく斯ういつて、輕く頭を下げました。

『けれどねえ、吉野さん。』

と、勝子は意味ありげにわざとにやりとして、

『世の中つていふものは種々ですね、喜ぶ人もある代りに、口惜しがつてる可哀さうな人もあるものですよ、得意の人があれば失意の人も居ますわねえ。』

『そりやアさうですわね。』

『おや、あなたもさういふ事を御存じなの。私はまた知らないのかと思つてゐましたよ。』

と、勝子は嵩にかゝつて、冷評すやうに言ひました。吉野さんは眼を伏せて、ぢつと足許を見つめたまゝ默つて居ました。

『私の室の八重子さんは可哀さうなんですよ、今日の獨唱をさせられるつもりで、毎日さん〳〵お稽古をして置きながら、病氣が快くなつたからつて、知らん顔でまた自分が出るつていふ方もあるんですもの。出られなくなつたのよ。』

ぢろりと冷たい眼を働かせながら、なほも言葉をつぎました。

『あなたも、もしお妹さんがそんな我儘をなさるやうなら、よく言つてお上げなさる方が好いでせう。』

『御用はそれだけですの、私は少しいそぎますから、それぢやあ失禮。』

と、手にした細長く卷いた紙を持ち直して、吉野さんは調子もかへず靜かに立ち去らうとしました。

『わからない人つて、何をいつても仕方がないものねえ。私が遠廻しに忠告しても通じないんだから、困つたものねえ。』

と、勝子は聞えよがしに、吉野さんの後から大きな聲で浴びせかけました。

これを聞くと吉野さんは、きつと眉を上げて踵を反さうとしましたが、はつと思ひかへして、後も見ないで、右手の休憩室に宛てられた一室に入つて行きました。

後では、何かわざとらしい高笑ひがどつと起りました。

第二三　夢の曲

文藝會のプログラムも、いよ〳〵終りに近づきました。

校長先生の開會の辭についで、一同が君が代を奏し、つゞいて一年生の可愛い生徒の對話やら、朗讀やら、つぎ〳〵に順序よく運ばれて、今度は美代子の獨唱となりました。

『ほら、今度は氣どりやさんの番ね。』

『いやに澄ましこんでるぢやありませんか、あれで失敗つたら、よつぽど面白いんだけれど。』

『あのお得意さうな様子つたらないわ。』

『憎らしいほど澄ましてるわ。』

と、ピアノの伴奏にと、しづ〳〵と出ていらしつた森田先生の後につゞいて、すらりとした美代子の姿が壇上に現はれた時、意地の悪い拍手とゝもにヒソ〳〵と囁き合つた勝子や君子などの言葉でした。

美代子は振りの長い亀甲絣のお召に、襞の正しい鹽瀬の袴を少しひくめにきちんと穿いて、癖のないお下髪に、焦茶のリボンを高い前髪の處で大きく結んだ、さつぱりとした様子で、ふし目勝ちに多くの聽衆の前に立ちました。

而して、みんなから蔭口を言はれて居ることは夢にも知らず、先生の彈き出す高いピアノの調子に連れて、燃えるやうな瞳を上げて歌ひ出しました。

『さア、しつかり謹聽しませうよ、あの御自慢の歌をね。』

『叱ッ、騷々しいことね、ちつと靜かにしないから、今校長先生のお目が、こつちの方を御覽になつて光つてよ、あとでお目玉でも頂戴したらつまらないわ。』

『はい〳〵、それぢや謹しんで拜聽するこゝにいたしませうよ。』

と、わざとらしく身づくろひして向き直つた君子は、そつと勝子の袖を引いて、

『ね、ちよいと、あの窓のところを御覽なさい、ねるでせう。』

『何？』

『ね、さつきの澄ましやさんよ。』

『えゝ。』

と、うなづいて勝子は、流し目に彼方を見やりました。と、そこの少し離れた窓際には、何事も知らず顔な吉野さんが、ぢつと頸をたれて、熱心に美代子の美しい獨唱に耳を傾けて居ました。

吉野さんは、先刻受付の處で、皆から皮肉な言葉を聞かされて、一時はかつと腹を立てましたけれど、堪忍づよく何にも言爭ひもしないで休憩室に入つて行きました時、

『お姉さま、堪忍して下さいましな、私はみんな聞いて居ました……私のためにあんなこと言はれて、ほんとにすみません、何てつ

てお詫びをしていゝか。』

生徒が大抵會場に集まつたあとで、誰も居ない扉の蔭に隱れて聞いて居た美代子は、いきなり吉野さんの袖に縋つて、泣きながらお詫びをして、

『私のためにお姉樣にまで御迷惑をかけちやあすみませんから、これから先生にお願ひして、八重子さんと取りかへて頂きます。』

と、思ひ入つたやうに言ふのを、吉野さんは優しく止めて、

『いゝえ、そんなことをしちやあ却つてよくありませんよ、それよりあなたが立派に歌つて下さる方が、どんなに嬉しいか知れません。』

と、勵まし進めて立たせたことでもあり、日頃から何かにつけて、嫉視の眼を向けて居る多くの學友に對しても、美代子の成否が、わ

がことのやうに氣づかはれて、はじめてその人が壇上に現はれた時から、吉野さんは胸とゞろかせて美代子の成功を心ひそかに祈つて居たのでした。

曲も終りに近づいたのか、ピアノを流れる先生の指先も、やゝ緩やかになつて、幾百の聽衆は皆その美しい聲と、幽艶な響きとにすつかり醉はされて、廣い講堂内は水を打たやうに寂としてしまつた。

その時、ふつと美代子の聲が少しかすれて、幾分か慄えて居ることに氣のついた吉野さんは、

『あッ、どうしたんだらう。』

と、思はず瞳をこらして美代子の顏を打仰ぎました。

『まア、どうしたら好いだらう、もうお終ひになるんだけれど、歌

へるかしら、あんないやな顔色をして。』

と、吉野さんは心も心ならず、美代子の蒼ざめゆく顔色を憂はしげに眺めました。

……あゝ――ゆ――め……

と、その輝く瞳にだけ燃ゆるやうな色は見えながら、蠟より白くなつた面に決然とした様子で、やうやく歌ひ終つた美代子は、よろめく足をふみしめて、先生の後について壇を下らうとしましたが、まだ本當に癒えきらぬ病後のつかれと、張りつめた氣の緩みに堪へきれず、どうとそこに倒れました。

『あッ。』

『どうしたんでせう。』

『どうしたんだらう。』

と、今までその顔に魅せられて、一語も出さなかつた人々は、思はず斯う叫んで、急に場内は騒がしくなりました。

『どうしました、京極さん。』

『しつかりなさいよ、どうしたんです？』

バラ〳〵と駈けよつて先生が、抱き上げて斯ういつて居る處へ、吉野さんも群がる人を押しわけて飛んで來ました。

『美代子さん！　しつかりなさいよ、私ですよ、わかつて、わかつて。』

吉野さんは人目もいとはず、しつかり抱きよせた美代子の耳に口を當てゝ、

『美いさん、しつかりして頂戴、よ、よ、美代子さん。』

と、小使が持つて來たコップの水に藥をとかして、口に含ませながら言ひました。

美代子は幽かに眼を瞠いて、

『お姉さま！』

と、瞼に泪をにじませて、しつかり吉野さんの手を握つて、

『すみませんお姉さま、私は……私は、駄目でしたわね。』

きつと色褪せた唇を嚙みしめて、ほろりとしました。

『いゝえ、そんなことを心配しなくつても、よく出來ましたから安心して、ね、美代子さん。』

と、吉野さんも曇つた聲で言ひました。

『私はみなさんにも濟まなくつて……どうぞお姉さまからお詫びをして下さいまし。』

美代子は自分の苦しさを忘れて、たゞその罪を恥ぢ入るいぢらしい樣子に、がや〳〵と周圍により集まつた人たちも、同情せずには居られませんでした。

『兎に角、靜かに休ませなくてはいけないでせうから、あつちへ連れて行つたら好いでせう。』

と、校長先生が小使を呼んで、吉野さんと一緒に寮の方へ連れてゆきました。

『あゝ吃驚したわ、でも好い氣味だつた。』

その騷ぎを人たちの後から見て居た君子が、あとを見送りながら

八重子に囁きました。

『でも、私は氣の毒にもなつたわ、あんまり可哀さうなんですもの。』

と、さすがに意地の惡い勝子も、美代子が病を押して終りまで全うした立派な獨唱ぶりと、責任を負うたその可憐な言葉に心を動かされて、しんみりとして言ひました。

『さうね、さういへば氣の毒だつたわ。』

と、ぼんやりして立つて居たよし子も言葉を合せて、

『でも、あんないやな顏色をしながら上手に歌つたことね。さすがに甘いと思つたわ。』

『私もよ、歌つてゐる時は、すつかり引き入れられて聞いて居たわ。』

『病氣揚句だつていふのに、よくあんなに聲が立つたものね、全く感心しちやつてよ。』

と、いつも美代子に快からぬ人たちも、すつかり感じ入つて噂をして居ました。

そのうちに二つ三つ殘つた新體詩の朗讀やら、英詩暗誦やらが無事に濟んで、閉會の辭をつげる頃には、華やかな電燈が室内を輝かして居ました。

『吉野さんと京極さんとは、ほんとの姉妹つて言つてもない位、仲が好いのねえ。』

『えゝ、ほんとうにね、先刻もあんなにして京極さんを介抱なさるんですもの、私も見てゐて羨ましかつたわ。』

『吉野さんて優しい方だわねえ。』

と、その夜の寮では、今日の出來事を噂し合つて、二人の親しさを羨ましがりました。

あまりの愛らしさに憎しみの心を起し、やさしい振舞のためにわざと除けものにしてゐた美代子が、どこまでも反抗せずに、われと我が身をつゝましやかにして居るのを見ると、いかに意地のわるい君子たちも、この上苛めるのは何となく後めたいやうに思ひました。殊に文藝會の日の可憐な樣子から、學校でも寮舎でも、一部のものは蔭ながら美代子に同情を表するやうになりました。

やさしい心、美しい行ひ、いつまでも美代子は憎まれてはゐないでせう。

第二四　わかれの宵

花が散る。花が散る。

咲いたばかりの櫻の花が、ヒラ〳〵と散つてゆきます、月も人も朧の宵。

紫紺色紋付の、下には白を襲ねて、鹽瀨の袴をキリ、とはいた吉野さんは、樹かげのベンチに腰を下ろして、梢を打仰ぎました。

『私がこの學校へ入學つてから、五度目の春が來た。』

ひく〳〵呟いて、うつとりと過し方を回想してみるのでした。永くて短かゝつた五年の月日、その間にあつたいろ〳〵の思ひ出、辛いこと、悲しいこと、嬉しいこと、すべての情緒が一しよになつ

て、すうつと胸の上を辷つていつたやうな氣がしました。と同時に、いよ〳〵別れだ！　といふ思ひが、ひしと胸にせまつてきて、思はずあゝと息をつきました。

――いまあこそ、わか――れめ、いざ――さらあば――

ひく〻唱ひながら、二人手をくんで木かげを行き過ぎる人があります。揃ひの色の紋付を着て、千代田草履の音もさびしく、彼方に消えてゆく人の影を見送つて、吉野さんはまた、

――いまあこそ、わか――れめ――

と、口吟んでみました。

『吉野さん！』

忍びやかに、しかも力づよい聲が聞えて、美代子の姿が現はれました。

『あゝ、美代子さん。』

美代子は、つと寄つて吉野さんの膝にすがりながら、

『お姉さま……もうお別れ……。』

『えゝ。』

とばかり、袴の間へ顔をうづめて、身を震はして泣いてゐる美代子の背へ、吉野さんも突伏しました。と、われ知らず熱い涙がにじみ出ました。二人とも暫くさうしたまゝ、聲をしのんで泣きました。

やゝあつて、美代子の方から顔をあげ、

『すみません、堪忍して下さいましなお姉さま。おめでたい日に、こんなこといつて泣きまして……。』

『いゝえ。』

吉野さんも濡れた頰のまゝ、

『いゝえ。卒業式だなんていつたつて、私はちつとも嬉しかあないの、私はもう學校ともあなたとも、別れなくつちやならないのですもの、わかれなくつちやあ……。』

然ういふと、また悲しさがこみ上げてきました。

『どうぞね、いつまでも忘れないでゐて頂戴。私はあの、寒い北の國へ歸るんです。東京はもう春だけれど、暗い國はまだ雪がやうやう消えたばかり、歸つていつたつて、青草一本生へてやしません、私はそんなにさびしいところへ歸るのですから、思ひだした時には、御手紙をね、そればかり樂しみにして待つてますわ。あなたは今まで、ずゐぶん苦勞をなすつたけれど、ぢつと辛抱なすつたから、丁度、春先の陽氣でお池の氷がとけるやうに、何もかもいゝやうになつて來ました。あんなにひどかつた君子さんたちまで、この頃は、すこしづゝ優しくなつてきたつていふのでせう。それに今日は今日で……嬉しかつたでせう、私もうれしかつた。京極美代と、一番さきによびだされて、あなたの姿がしづ〳〵と式場へ現はれた時、私は泣きたいほど嬉しかつてよ。どうぞ、おしまひまで首席をはづさないやうに、そしてその優しい心を失はずに、一筋道を歩いていつて下さい。このさきだつてまだ〳〵、どんな辛いこと苦しいことが起らうもしれませんけれど、今のまゝのお心でね。私が、この口からあなたの耳へ、こんなことを呟くのも今日でおしまひよ。』

『ありがたう、お姉さま。私は決して忘れません。私のことも屹度ね、お姉さま。私はお姉さまに、お世話にばかりなつてゐて、どうすることもできないうちに、もうお別れの日がきてしまひました。辛い辛い、いやだ〳〵つて駄々をいつて、あなたを東京におきたいけれど、叔父さまがきていらつしやるつて、仕方がないわ。ほんとうの叔父さまなら、我儘もいへるけれども義理の中だからさうもいかない、明日の夜汽車で立つとおつしやるのでせう、あの暗い上野からね。しみ〴〵お話できるのは、今ほんの僅かつきり、私はもう言ひたいことが一杯で、何からいつていゝかわかりません。一つも口に出てこないの。』

『そんなにまで、私のことを思つてゝ下さるの。私だつて歸りたい

ことはちつともない、思つても暗い氣のする北の國へなぞ……。また歸るにしても、十日位はこゝにゐて、あなたと一しよに方々遊んであるいてと思ふんだけれど、そんなことはできないし……、もう今日一日きりだと思ふと、今朝から時の經つのが惜しくつてたまらないの。それに今まで、式だの送別會だのつて、ろくに顏合せる閑もなかつたんですものね。私は氣が氣ぢやなかつてよ。』

『私だつて。試驗がすんだのはうれしいけれども、あなたとお別れすることを思ふと、胸がいたくなるんですもの。あゝ、いつまでもいつまでもかうしてゐたい。』

二人はまた手を握りしめて、離れじとばかりによりそふのでした。

『ねえ、美ちやん。』

『え？』

『私はねえ、これから灰色の少女になるのよ。灰色の國で、灰色の家で、灰色の生活をするのよ。私の一生の中で一番華やかなのは、この學校に居た間だけなの。その間だけには、みどりだの紅だの紫だの、いろ〳〵な色彩もあつたけれど、その前もその後も、同じ色の灰色なのよ。いくら寂しくても寂しいなどゝは、もう決して〳〵口にしません。心が冷たくなつた時には、あなたのことを思ひだして、昔の樂しい夢のあとをたどつてみるわ。あなたはどうぞ、いつまでも華やかで純な少女であつて下さいよ。寮舍の花として輝く日のことを、私は遠い空から想つてゐますわ。』

『そんな、そんな。悲しいことおつしやるわね、お姉さまは。私何

と申し上げていゝか解りません。思ひ出すと寂しいことばかりなのですもの。あの、こんなこといつちやなんですけれど、亡くなつたお母様のやうな氣さへして、悲しいことのあるたびに、お袖のかげにかくれて、涙をふいて頂いてゐたのに。それはもう私だつて四年生になつたんですから、いつまでも赤さんみたいにしちやゐられませんけれど、でも、やはり、やはり……。』

『可愛いことおつしやる。だから、だからねえあなたは……。』

しつかりと兩袖でかゝへるやうにして、

『美ちやん。』

『えゝ、お姉さま！』

『忘れないで……。』

『お姉さまも。』

二人ともあまる思ひを眼で語りあつて、また涙ぐみました。

チラ〳〵と、梅の寮竹の寮の灯が樹立の間を縫うて、田舍まつりの宵のやうに、美しくまたゝきます。折々、どつとおこる笑ひ聲、竹の寮の送別會は、まだすまないらしい。

鳩羽色に御所車の模様をおいた、美代子の華美な袖も、吉野さんの袂も、夜氣にぬれてしつとりと、月の影はいよ〳〵おぼろに、花は音もなく散つてゆきます。

二人は無言のまゝ、ひしとよりそふて、そこを離れやうとする樣子もありません。いつまで斯うしてゐるのでせう。

第二五　最後の勝利

吉野さんは、とう〳〵歸つてしまひました。

街の家々に灯の入りはじめた夕暮の六時といふに、寒い感じのする上野の驛から、叔父なる人につれられて、暗い國をさして歸つてゆきました。

プラットホームの太い柱にもたれて、のびあがり〳〵見送つて、ぞろ〳〵と歸りの下駄を鳴らす人たちの中に、恥かしい泣き顏をかくして、驛夫に怪しまれるほどぢつと佇んでゐた美代子は、その夜、寮へかへつてからも、やるせなさに胸が一ぱいになつて、御飯もたべず、ふすまかついで、別れた人の上をおもひつゞけました。

一日、二日、五日七日となつて、北の國の吉野さんから、安着した報知や、思つたよりなほ寂しいといふことなど、いろ〳〵かいた手紙がくれば、こちらからも負けず劣らず、寮舎のことや別れた悲しさを桃色のレターペーパーに運ばせました。書いてもかいても書きつくされぬ思ひが、毎日のやうに互ひの胸に繰り返されました。

日を經るにしたがつて、美代子はいよ〳〵なつかしさの增し行くのを覺えて、別れるその日に、一しよに撮つた寫眞を机の上にかざつては、飽かず眺めるのでした。

その中に新學期が始まりました。

吉野さんがいつてから、一人きりになつてゐた美代子の部屋へ、また可愛い人が入りました。まだ引詰めのお下髪にして、紅いリボ

ンを大きく結んだのが、十四の年より幼ない姿を、一しほ邪氣なく見せました。

美代子は姉らしい心持になつて、その人の世話を、丁度吉野さんが美代子にしてくれたやうにするのでした。

『私の名はね、優子つていふんですけれど、だれも優子さんなんてよびませんの。皆、お優ちやん〳〵、お優ちやんのおてんばつていふのですよ。』

斯う言つて優子は、はじめから臆せず快活に話しました。

『お家は麹町よ。えゝ富士見町、富士がみえるんで富士見町つて名がついたんですつてね。ほんとによく見えてよ、お家の二階からなぞ……。私は一人つ子なの、だから甘えていけないんですつて、寮にでも入れなければ駄目だつて、だから……。芝の伯母さまがおつしやるもの好きぢやあないのよ、お叱言ばかりおつしやるんですもの。市兵衛町の叔母さまの方が、どんなにいゝか知れやしない。』

父さまも母さまも、おぢいさまおばあさまゝでいらつしやるといふ、平和な家庭にのんびりと育つた優子は、どこ迄も無邪氣でした。

『私、あなたのことお姉さまといつてよ。ねえ、いゝでせう。これからお姉さまになつて頂戴な。』

可愛い片えくぼをみせて、小首かしげて問はれると、

『えゝ、えゝ、なりますとも。こんな小さな姉さまでもよくつて？』

と答へながら、美代子はいつのまに自分が人からたよられるやうに

なつたらうと驚き、責任といふこともしみ〴〵感じるのでした。

『お姉さま、お姉さま。』

美代子は、學校から歸つたばかりで、机の上に本づゝみをおき、袴をとらうとしてゐるところへ、優子がせい〳〵いつて入つてきました。

『どうなすつたの、まあ、息をきつて。』

『だつてね、だつてね。』

と、優子は息をつぎ〳〵、嬉しさうな表情をして、

『だつて、あんまり嬉しかつたんですもの、おめでたう、姉さま。』

『何なの、何がおめでたうなの。』

『きいてよ私。今ね、運動場でかけつくらをしてゐたら、姉さまの方の組の方で、そら、竹の寮にいらつしやる方やなんか三四人で、優子さんおめでたうつていふんでせう。私突然だつたから、きよとんとしてゐたら、あゝまだ御存じないんでせう、あなたのお姉様はこんど級長におなりなすつたのよ、あなたもお嬉しいでせうつて。そして、あなたの姉さまは寮舍の花よ、ほんとに清い方、私はあなたの姉さまにおわびしなくちやならないことが澤山あるのつておつしやつてよ。さう〳〵、あのハイカラな井上さんて方。』

『まあ！』

『ほんとうなんでせう姉さま、おめでたう。』

『ありがたう。』

『嬉しいなあ、うれしいなあ。私の姉さまは寮舎の花なんだもの。』
『いやよ、お優ちやん。そんなことありませんわ。』
『だつて皆さういつてゝよ。私の組の人だつて、皆私を美ましがつてるわ。お優ちやんはうれしくつて〳〵……。』
と、優子は無邪氣な樣子をいとゞあどけなくして、自分のことのやうに喜びました。

よくなりかけると、すべてがよくなるものです。今日、級長の選擧をした時にも、滿場一致で美代子に手を擧げました。あれほど意地のわるかつた君子さへ、皆に率先して、『美代子さん』と叫んだ位でした。美代子は夢のやうな氣がしました。と同時に、級長といふ重い責任を深く思つて、全力をあげてつくさうと、かたく決心しました。

『岩井さん、おむかへでございます。それからあの、このお手紙は竹の寮の井上さんから京極さんへ。』
音もなく障子をあけて、小使のお婆さんが手紙をさしだしながらいひました。優子は土曜日毎にむかへがきて、家へ歸るのです。
『何のお手紙かしら？』
美代子は、いぶかしげにみまもりながら、
『井上さんは、もうお家へお歸りなすつたの？』
『はい、いましがた……この手紙を賴みますよとおつしやつて、出ていらつしやいました。』
『さう、どうも御苦勞さま。さアお優ちやん、お支度、お支度。』

『今日はね、このまんまで歸るのよ。この前に歸つた時、母様があの矢がすりの着物も汚れたでせう、お洗濯しなくちやならないけれど、わざ〳〵持つてくるつていふのも面倒だらうから、この次くる時に着ておいでつておつしやつたの。』

『それぢやあ、もういゝんだわね。』

『えゝ、すつかりできてゝよ。持つていく御本まで、ちやんとくるんであるわ。』

『お手廻しのいゝこと、お家へ歸るもんで……母様のおつぱいをどつさりめしあがつてらつしやいよ。』

『いやあよ、そんなことといつて……明後日の朝早く歸るわね。あゝ、先生んとこへいつて來なくつちやあ……ぢやあ姉さま、いつてまゐります。』

しをらしう手をついて、頭をさげました。

『いつていらつしやい。あゝ、ちよつと。』

リボンの形を直してやつて、

『さ。』

『ありがたう。』

『電車の飛び乘りなんぞして、お杉さんを困らせるんぢやありませんよ。可愛いけれどお轉婆な御嬢樣だなんて言はれますからね。』

『えゝ、もうしませんわ。杉はほんとうにおしやべりねえ、何でもかんでもお姉さまにいひつけちまふんですもの、だから私……。』

『まあそんなことはどうでもいゝから、早くいらつしやいな。お杉

さんがまちかねてゐますよ。』

『はいはい……こんどこそほんとうに、行つて參ります。』

『ほゝゝゝ、いつてらつしやい。』

いそ〳〵と出てゆく人の姿を見送つて、美代子はまた君子の手紙をとりあげると、

『何の御用かしら？』

と、首をかしげましたが、思ひ切つてビリゝと封をさきました。

うす桃色の卷紙に、墨のあと優しく、こま〴〵とかきつらねたのは、思ひがけない、今までのはしたない罪の許しを乞ふ文句ばかりでありました。

――あまりに厚かましくは候へども、この不束ものを妹とも思召して、おん導き下さらば、いかばかり嬉しく候べき――

ぢつと見つめて、美代子は胸の高鳴るのをおぼえました。

『あゝ吉野さん、吉野さん。今こゝに吉野さんがいらして、今日のことをきゝ、またこの手紙を御覽になつたら、どんなに喜んで下さることだらう。誠心といふものは、いつかは通る時がある、きつと通る！その時を樂しみにといつて下すつたあの言葉は、まだ耳の底にあり〳〵と殘つてゐる。その嬉しい日がきたのに、吉野さんはもうゐない――』

つと、寫眞立てを手にとつて、

『吉野さん、喜んで下さいな。』

と、その人にいふやうに呟きました。

最後の勝利！　やさしい美代子は、遂に最後の勝利者でした。多くのお友だちから冷やかな眼で見られたことも、今となつては懷かしい思ひ出です。

『はじめて寮に入つてから、ほんとに私悲しい日を送つたけれど。』と、美代子は過ぎ來し方を顧みて、一種得言はぬ感じに、胸が一ぱいになるのでした。

『けれど、けれど私は……。』

幾多の憎しみや冷笑を忍び忍んで、たゞ小さい心一ッにすべてのことを收め包んで來た美代子の健氣さは、今、寮舍と學校との隅々までも知れわたりました。

これまで除けものゝやうに睨まれてゐた冷やかなお友だちにさへ、寮舍の花、學校の誇りとして慕ひ親しまれるやうになつた美代子は、さすがに樂しい微笑を浮べずにはゐられませんでした。

斯うして寮舍の花といつくしまれるやうになつた美代子の行く手には、うらゝかな春の光が輝いて居ります。暖かい光が張りつめた厚氷を解かすのと同じやうに、やさしい情は頑な人の心にも柔かい感じを與へ、清い眞心はあらゆるものに打ち勝ちました。美代子のけだかい人格は、花よりも麗はしい色香を見せて居ります。

郷里の友なる玉子と、姉と呼ぶ吉野さんとに、嬉しいたよりを書かうと机に向つた時、美代子の心には抑へ切れぬ喜悅が充ち滿ちて居りました。

寮舍の花 終

附錄

鄙の花

一

『お初、お初！……』

と呼ばれる聲に驚いて、お初は讀みかけてゐた書物に栞を入れて、

『はあい、すぐに行きます。』

と、大きく答へました。

『さあ〳〵、もうみんな行つてしまつたんだよ。また遲くなると、お父さんに叱られるから。』

と、母は縁側まで來て、室内を覗くやうにしながら、斯う言つて音づれました。

『えゝ、すぐ行きますわ。』

と、立ち上つたお初は、はや甲斐々々しく手甲をはめ、赤い襷を肩にかけながら室を出ました。

春が來ても、田舍の百姓は麥の草取りで可なり忙しい。お初は十五の少女盛りを、赤い襷に姉樣冠りの仕事姿で、毎日田圃へ出て働かねばならないのです。去年の春、村の小學校を優等で卒業した時、お初の小さな胸は、どんなに大きな希望と誇りとが波立つてゐたことでせう。

『どうぞ、女學校へ通はせて下さい。』

斯う言つて、兩親に幾度も賴んで見ましたけれど、家庭の事情は健氣な少女の願ひを許しませんでした。

『女學校へやつて下さらない位なら、私もう死んだ方が好い。』

一心に思ひつめたお初は、折角の願ひが聽き入れられないので、どんなに歎いたか知れません。

『そんな解らないことを言つて、お母さんを困らせることがありますか、そりやアもうお前が言はなくつても、お父さんやお母さんは、どうにかして學校へ上げて、立派なものにしてやりたいとは思ふけれど……』

と、術なげな母の言葉を聞いても、お初はたゞ悲しくて遣る瀨なくてたまらないのでした。

『お隣りの美喜子さんもいらつしやるんだし、學校の先生もさう仰つしやるんだから、どうぞお母さん、……一年でも好いから。』

叶はぬことゝは知りながら、またしてもお初は母の袖に縋つて、無理なことを願つて見るのでした。

『何と言つても今年は駄目だから、ね、また來年にでもなつたら、少しは家の都合もよくなるかも知れない、お父さんだつてあんなにお前のことを心配していらつしやるんだから、まあ大人しく働いておくれ、ねえお初。』

なさけ溢れた母の口から、斯う云はれますと、それでもとは言ひかねて、お初は花さく時期を待つゝもりで、朝は早くから夕は遲くまで、家のものと一しよに田や山に行つて働きました。而して、その閑々に雜誌を讀んだり、お友達から借りた書物を讀んだりして、僅かに心を慰めて居りました。

今日もお晝御飯に歸つた閑に、せまい自分の部屋に足を入れて、偸むやうに書物を讀んでゐたのを、母に呼ばれて立ち上つたのでした。

『お母さん、やつぱり南谷の田圃でせう。』

『あゝさうだよ、今日は晩までに彼處をしまひたいつて、お父さんは急いで行らしたよ、私も晩御飯の支度をしておいて、すぐ後から行くから、お前一足先にね。』

『お母さんも行らつしやるの、そんなら晩までに大丈夫濟みますわ、ちやあ私、さきに行きますよ。』

と、門の戸に立てかけてあつた鍬を擔いで、お初は急ぎ足に出て行きました。

二

お初はこの頃、毎晩おそくまで手紙を書いて、何か深く考へ込むやうになりました。

去年の春小學校を卒業して、女學校へとの願ひが聽き入れられなかつた時、『來年になつたら』……『もしか家の都合がよくなつたら』……と、はかないことをせめてもの望みとして、まる一ヶ年苦しい百姓仕事に何の不平も言はず働きながら、僅かな閑を惜しんで勉强して來ました。

待ちに待つた今年の春、新しい卒業生が嬉しさうな顏をして、それ〳〵新しい學校へ入學する時になつても、お初の去年からの望みは、まだ何時遂げられさうにも見えません。

『今年も駄目！　私はもう華やかな學校生活は出來ないのか知ら？　こんな山の奥で、なんにも知らずに一生朽ち果てるのは情ない、あの學校生活、高等女學校……どんな苦しい思ひをしても構はないから、早く高等女學校の生徒と言はれて見たい。』

こんなことを考へると、お初は未來の希望と現在の悲しさとに、胸の血が湧き立つやうで、果ては譯のわからぬ涙がホロ〳〵とこぼれ落ちるのでした。

『いくらお父様に願つても、家の事情がこんなぢやあ、とても許しては下さらないだらうし、さうかと言つて、何時までも斯うしちや居られない、同い年のお友だちは、はや二年になつていらつしやる、美喜子さんも絹子さんも、あゝしてズン〳〵進んでいらつしやるのに、私は山の間でおくれるばかり……あゝ、ほんとに斯うしちやア居られない。』

と、毎晩小さな胸を痛めながら、せめて都のお友だちに學校の事情だけでも知らせて貰はうと、お初は閑さへあれば、ながい手紙を書くのでした。而して、

『私はどんな苦しいことでも厭ひません、たゞ學校へ入學して勉強する閑さへあれば、それで本望なんですわ、ほんとに一生懸命になつて苦學しますから、私の力で出來るやうな方法があつたら、どうぞ〳〵知らして頂だいな、まだ父母の許可は得ませんけれど、私、いつでも上京出來るやうに準備して居りますの。』

と、堅い決心を書き添へるのでした。けれども都の友からは、たゞ學校生活の樂しさや、都會の空氣の華やかさを知らせて來るばかりで、お初の苦學の方法については、何一つとして手がゝりになるやうなことはありませんでした。

『精神さへしつかりして居れば、苦學だつて出來ないことはないわ、私、どうしてもこのまゝぢやア居られない。』

と、同じことを繰り返しては、いつまでも都會の學校生活にあこがれてゐました。

三

朝から春の雨が柔らかに降つて、農家の休み日を幸ひに、お初の家へはお友だちの鈴子が、隣村から遊びに來ました。

學校ではさほど仲のよい方でもありませんでしたけれど、卒業してからは、他のお友だちが皆女學校へ入學したり、奉公に出たりして、散り〳〵になつたのに、二人は家に殘されて同じやうな境遇になつたものですから、お互に度々音づれ合つては、さびしい心を慰めてゐるのでした。

『ねえ鈴子さん、如うして何時まで待つてゐたつて、私たちの春は巡つて來ないんですもの、だから私、いつそ思ひ切つて東京へ行かうかと思ふのよ。』

と、お初は聲をひそめてさゝやきました。

『まあ！何時？』

と、さすがに鈴子は驚きの眼を見張りました。

『何時つて、まだ日は定まらないけれど、……貴女は行きたかあなくつて。』

『行きたいわ、行きたいわ、そりやあもう毎日そのことばかり思つてるんですもの。』

『ぢやあ、一緒に行きませうか。』

『えゝ行きたいわ、でも、お家でお許しになつて？』

と、鈴子は不安さうな眼を輝かせました。

『いゝえ、家ぢやあ許してくれないわ、だから默つて行くのよ、私前からさう思つて、旅費ぐらゐは持つてるの。』

と、お初は家の人に聞えぬやうにと聲をひそめながらも、どこやら決心の色を現はしました。

同じやうに、女學校の名にあこがれ拔いてゐる鈴子は、お初の言葉を聞いて、そゞろ心を動かしました。

『私だつて家ぢやア許してくれないんですもの、困るのよ、だから毎日いろ〳〵考へてるんですけど……』

『私も、もう前から毎日のやうに考へたのよ。でもね、家の都合はよくないんだし、どんなに願つてみたつて駄目なことは定まつてるんですもの。だからどうしたつて默つて拔けて行かなくつちやあ、いつまでも行かれやしないわ。』

『ぢやあ貴女は、どうしても行くつもり？』

『えゝ、決心したんですもの。』

『而して、行つてから如何なさるの？』

『どうするつて、私、東京へ行つたら何處かの女中になるか、會社の事務員にでもなつて、その閑々に苦學しようと思ふのよ。』

『そんなこと出來るでせうか。』

『一生懸命になつたら、どんなことでも出來ると思ふわ、それに私いろんなこと調べて、もうよつぽど前から準備してるの、……貴女に好いもの見せて上げるわ、これ御覽なさいよ。』

と言ひながら、お初は傍の書物箱から、東京遊學案内や女子職業案

内を取り出して、内しよで鈴子に見せました。

『ね、これを見ると、ぢつとしちやあ居られないでせう、だから、私、思ひ切つて行つたらどうにかなるだらうと思ふの。』

『さうね、私も遊學案内は持つてるのよ、でも知つた人がなくつちやア困るでせう、東京は誘惑が多いつて言ふから。』

と、鈴子は書物のページを繰りながら、半ば疑はしさうに言ひました。

『そりやもう困るのはわかつて居るんですもの、覺悟はしてるんですけど……でもね、少しは知つた人があるのよ。』

と言つて、お初はまた机の抽出から、一通のながい手紙を取り出しました、それは東京の或るお友だちから來たものでした。

四

雨の日に、お初と鈴子とは忍びやかに語り合つて、いよ〳〵上京のことに心を定めました、而して東京のお友だちに長い〳〵手紙を書きました。

手紙を出してから返事のくるまで、お初は毎日、繪のやうな希望と淡い不安とに心が亂れて、何だか仕事も手につきませんでした。

『お初！　お前どうかしたのかえ、ぼんやりして居て仕樣がないぢやないか。』

臺所の用を手傳ひながらも、よごれたお茶碗を片手に持つたまゝ、うつとりと考へ込んで居ると、母に斯う言つて注意されることが度

度ありました。

『どうもしやしないわ。』

『だつてお前、閑さへあればぼんやりして、考へ込んでばかり居るぢやないか。』

『嘘よ、なんにも考へることなんか無いんですもの。』

悟られないやうにと、何氣ない顏を裝ひますけれど、やつぱりいろんなことが考へられてならないのでした。

『私が居なくなつたらお母さんは、どんなにか心配なさるだらう。』と思ふと、さすがに後の事が氣にかゝります。けれども、そんな弱いことを言つて居る時ではない、東京へ行つたら、――二三年の後には立派な人間になつて、――その時にはお父様にもお母様にも安心して頂ける、不孝な子となるのも暫らくの間のこと、愁ひに打ち開けて面倒を引き起すよりも默つて行つてしまはう――。斯う思ひ直して、お初は兩親の眼に觸れないやうに、そつと着物や書物をまとめて、荷造りをしておきました。

『汽車賃と宿賃と、お金はこれだけ持つて居りやあ大丈夫、一ケ月位困りやあしないわ、着物もこれだけあれば澤山だから、もう手紙の返事さへ來れば好いの、……でもいよ〳〵行くといふ日になつたら、どんな氣もちがするだらう？、もうこの部屋だつて、しばらく見られないんだもの。』

か弱い少女の胸は、またしても執着の心に搔き亂されるのでした。

上京、故郷、學校生活、兩親の愛着、はじめて遠い旅路に上る嬉

しさ、故郷にわかれる悲しさ、お初の心のあわたゞしさは、譬へる術もありませんでした。

五

『おいお初、もう止さうぢやないか、こんなに暗くなつたから、後はまた明日のことにしよう。』

暮れの色に蔽はれた空を仰ぎながら、父は斯う言つて鍬の手をやめました。

『あんまり遅くなりますから、ぢやあもう止しませうか。』

『あゝ、止して歸らうよ、明日もお天氣だよ。』

草鞋の土を拂つて、父は先に家路に向ひました。ながい春の日も暮れて、次第に迫る夕やみの中を、お初は今宵都の友から手紙が來て居るかも知れない、もし來て居たら、これが田にも山にも暫らくの別れ、……と物思ひに沈みながら、ぼそ〳〵と歩みました。

家に歸るとお初は、何よりも先に自分の部屋を覗いて見ました。薄暗くなつた室内も、日ごろよく勝手を知つて居りますので、さぐり足で机の傍まで進み寄り、パッと燐寸を擦つて見ました。

更紗模様の青い巾をかけた机の上に、あざやかに白い印象を留めた一通の手紙！

『あッ、來て居る。』

と、思はず口走つたお初は、他人のものを偷むかのやうに取り上げ

て、手早く帶の間に挾みました。

夕飯をたべる間も、お初の眼と心とは、ちつとも落ちつきませんでした。

『また、どうかしてるよ、お初は……』

と、母に言はれる毎に、お初は夢から覺めたやうに、四邊を見まはしました。

『今日は田圃でも何か考へてばかり居たぜ、どうかしてるんだらう。』

と、父にまで怪しまれて、もしか悟られたのではないかと、物怖ぢするやうな眼で、それとなく帶の所を見守りました。

漸くのことで臺所の後片づけもすみました、けれどお初は、悟られてはならぬと思ふので、わざと落ちついた樣子をして、

『お母さん何かお仕事はないの、お父さんの襦袢でも縫ひ直しませうか。』

と、灯かげに坐つて尋ねました。

『さうだねえ、襦袢はまだ洗濯がしてないから、今夜でなくても好いよ、お前勉强があるんだらう、もう此方のことは構はないでも好いからね。』

『さう、ぢやァまた何か御用があつたら呼んで下さいな。』

と言ひおいて、自分の部屋へ參りました。

ランプの灯をつけるや否や、お初は帶の間から手紙を取り出して、一氣に讀み下しました。一通り讀んでしまつて、ぢつとランプの灯を見つめてゐましたが、また解しかねるといふやうに、もう一度丁

寧に讀みなほしました。

『……初子さん、ほんとに惡いことは申しませんから、ようく考へて頂だいな、私もあなたのことについて、學校の先生や保證人に幾度も相談したのよ、でもやつぱり、そんな無謀なことをしちやあいけないつて。先生の仰つしやるにはね、無理に學校生活をするよりも、田舍で獨修する方が安全だ、而して靜かに勉强して品性の高い人間になれば、學力は少々劣つても構はないつて。ほんとうの敎育は學校で受けるのぢやあなくつて、自分から敎育して行かなければならないつて、仰つしやるの。それに兩親に無斷で出京するなんて、そんな亂暴なことがありますかつて、まるで私のことのやうに、さん〳〵叱られたのよ。だから初子さん、

私、あなたの心は十分にお察しするけれど、今が大切の時ですから、ほんとによく考へ直して頂だいな……』

と書いて、まだその他に少女の都會生活の危險なことや、境遇に安んじて精神を修養することや、獨學でも一生懸命になれば立流に成功することなどが、こま〳〵と認められてありました。

お初は手紙を見つめたまゝ、やゝ暫らくの間、ぢつと考へ込んでゐました。

『あんなに樂しみにして準備したんだけれど。』

と、近き過去の心もちを繰返して思ひ浮べました。

『けれど、やつぱり私の考へが間違つてゐたのか知ら？　學校生活はしなくつても、心の修養次第で立派な人間になれるんだもの、鄙の

少女でも、……花は咲く、日は輝く……』

期う思ひつゞけて、お初はその夜とう〳〵一睡もしませんでした。

けれども翌くる朝から、まるで生れ變つたやうに、新らしい希望を胸に抱いて、まめ〳〵しく立ち働きました。

しをらしく咲く鄙の花にも、人知れず美しい色香の宿ることであります。

（終）

少年少女文學
寮舍の花
著作權所有

大正二年二月　日印刷
大正二年二月二十四日發行

著者　沼田笠峰
東京市日本橋區本町三丁目八番地
發行者　大橋新太郎
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　水谷景長
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　博文館印刷所

定價金參拾八錢

東京市日本橋區本町三丁目
發行所　博文館
（振替貯金口座東京二四〇番）

愛らしき手に繙かるべき文學叢書

少年少女文學

▲各册石版彩色口繪一枚挿畫六個▼

出づ

四六判美本各册
紙數約二百七十頁
正價 各册 參拾八錢
郵稅各册 金六錢

武田櫻桃君著

怪島征服

少年少女文學第一編は出でたり、即ち怪島征服は此文學の先驅にして亦劈頭の偉觀なり。一少年あり、名を磯崎浪夫と云ふ。剛毅にして沈勇日本一代の富豪に知られて、一帆船を受け以て絶大の偉功を南洋の一角に樹つ、縡固より架空、唯我海國少年の志氣を鼓舞し其氣宇の大ならん事を期するもの、強ひて少年子弟に冒險を薦むるが如きは、著者の固より欲せざるところなり、讀んでよく著者の用意に思到せば、其描くところの壯快事一々深き印象を感受すべけん、海國男兒は讀め、讀んで其著者の眞意を知れ。

木村小舟君著

立志の旅路

「男子立志出鄕關、學若不成死不還」此詩古しと雖も、此意氣や千古渝る事なし。一少年其父不測の罪を得て憤死し、孤獨自ら居る。惟らく東都學府の中樞、行いて以つて立身亡父の靈魂を慰むべしと、即ち決然其閨門を去り、死境に陷つては又活路を覓め、筆舌盡し難きの苦楚を嘗めて東上す、其經路慘憺懸瀑岩に碎かるゝが如く、其雄圖や洋々大海の限りなきに似たり、讀んで我に學ぶの人あらば即ち共に手を携へて青雲を攀ぢん、來れ！少年諸子！

（博文館發行）

沼田笠峰君著

寮舍の花

寮舍に咲く花の色は赤か紫か將た白か、姿やさしい大和撫子、色美はしい紅薔薇、香ゆかしい水仙、夢見るやうな月見草、それにも增してしたらしい花一枝！　鄙の國から運ばれて、都の寮舍に愛でられる花少女のやさしく、雄々しい物語りは、この一卷に同情ある筆でしんみりと記されてあります、華やかな學校生活の經驗ある少女も、學校生活にあこがれてゐる少女も、俱に一讀せねばなりまん。

黑田湖山君著

少年膝栗毛

本を讀んであゝべらぼうに面白かつた！　と言はんと欲する者は先づ第一に此の書を讀め！少年膝栗毛は多くの少年書類中空前の珍著にして、最も我少年諸君に愛讀せらるべき無類の快著なり、おどけたる二少年の愉快極まる東海道徒步旅行、奇言奇行、珍問珍答、滑稽の事件自然に百出して、道中の戲談人をして笑倒せしめずんば止まず、我が少年にして此の書を手にせざるものは蓋し字の讀めないものか。

（振替貯金口座東京二四〇番）

少女世界記者

沼田笠峰君著

池田蕉園女史筆

『少女スケッチ』

▲彩色石版口繪二葉挿入▼

（全一冊）紙數四六判二百四十九頁　洋裝釘雅
正價金參拾五錢
郵稅金六錢

美しい少女、やさしい少女、ハイカラ少女、感心な少女、快活な少女、ゆかしい少女、あはれな少女、さま〳〵の少女の心と行ひとを、そのまゝ描いたもの平易な文章と趣味多い事實とは、小說よりも面白く記るされてあります。而もこれを讀めば、知らず識らずの中に一種の敎訓を味ふ事が出來ます。少女諸子の御一讀を祈る。

山村耕花君畫

『新少女スケッチ』

（全一冊）紙數二百五十餘頁　洋裝四六判南京綴美本
正價金四拾五錢
郵稅金六錢

さきに少女スケッチを出して大高評を博した著者は、更に新らしい觀察と新らしい筆致とによつて、この書を公にしました少女子の優にやさしい心、しとやかな態度、純潔な愛情、けだかい行爲、やるせない胸のなやみ、華やかな歡樂など、みな著者の溫かい筆によつて、さながらに描かれてあります。書中の事實は小說よりも面白くて、而も修身書よりも敎訓に富んで居ります。新時代の敎育を受けた少女は、必ずこの書を一讀せねばなりません。

——（博文館發行）——

双楓書樓同人編

名流百道樂

●博文館發行●

全一冊四六判美本
紙數四百九十頁
正價金九拾錢
郵稅金八錢

如何なる道樂を如何なる人がするか？

内容

○西行道樂○鶯道樂○人形道樂○擔ぎ道樂○古篆道樂○枕道樂○煙草道樂○新聞道樂○散步道樂○陶器道樂○五道樂○蛇道樂○小說道樂○手紙道樂○會席付道樂○刀劍道樂○火事道樂○古錢道樂○慈善道樂○繩暖簾道樂○謠曲道樂○脚本道樂○酒道樂○解剖道樂○馬道樂○禪學道樂○俳句道樂○讀書道樂○湯呑道樂○古池道樂○園藝道樂○射的道樂○衣服道樂○油繪道樂○芝居道樂○花見道樂○音曲道樂○羽織道樂○食道樂○尺八道樂○歌道樂○古物道樂○小鼓道樂○都々逸道樂○相撲道樂外五十五項

文學博士 井上哲次郎君序　文學士 岩橋遵成君
文學博士 遠藤隆吉君序　文學士 豐島要三郎君共編

東洋倫理 修養寶鑑

洋裝三六判洋布美本
紙數九百四十頁
正價 金壹圓拾錢
小包料金十二錢

編者の曰く、彼の世上紛々たる倫理學說の多岐多樣なるは、我等の言ふ處にあらず、たゞ茲に一部の「修養寶鑑」あり、苟も古聖賢が致知躬行の餘、後世に垂示せられたる訓言は、網羅して殘す處なし、以て世上の訓戒とすべく、以て心身修養の寶鑑とすべし、敢て青年學に志す人、又は東洋倫理を研究せんと欲する人の座右に捧ぐ。

●博文館發行●

ジョンラスキン原著
新渡戸農法學博士序　文學士 栗原基君譯

人間修養論

全一冊洋裝四六判
紙數四百三十頁
正價 金七拾五錢
郵稅金六錢

本書は英國散文の大家ジョン、ラスキン氏の傑作「セサメと百合」を邦文に譯したるものにして讀書の要契を論じて神智靈覺の本義を體し或は女子教育と女子の本分とを論じて婦人の精神美の意義を發揮し或は莊重の態度を以つて美術の根抵を人間問題と接觸せしめたるものなり江湖の男女學生はこれによりて新しき智見を啓發することの尠少ならざるを知る。

●博文館發行●

272
430

IJ-11

内外遊戯全書

▲全部拾五冊
小判洋裝並綴
紙數壹冊百五拾頁以上

正價 ●壹冊拾貳錢（減價分壹冊八錢）
◎郵稅壹冊四錢宛

割引
●五冊以上六分引
●拾冊以上壹割貳分引

《全部書目》

【一】ボート競漕：遠山熙君著
【二】新游泳術：稻田實君著
【三】ベースボール：津田素彦君著
【四】射的術及弓術（減價）：津田素彦君著
【五】銃獵案内：佐野信三郎君著
【六】庭球術（減價）：野田桂園君著
【七】玉突術：三宅鐵骨君著
【八】陸上競走（減價）：志岐守二君著
【九】鳥獸狩獵法（減價）：志岐守二君著
【一〇】昆蟲採集：安藤謙吉君著
【一一】室内遊戯法：志岐守二君著
【一二】漁魚術（減價）：滿尾藤次郎君著
【一三】馬術：遠山熙君著
【一四】福びき集：安藤謙吉君著
【一五】蹴鞠と自轉車：三井末彦君著

（博文館發行）

終

トエ(J-11

弘文堂